

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：47501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520256

研究課題名(和文)戦争詩の視覚性に関する総合的研究

研究課題名(英文)A comprehensive study on visual representations in war poetry

研究代表者

野坂 昭雄(NOSAKA, AKIO)

大分県立芸術文化短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：20331936

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、パノラマや写真、映画など、明治から昭和期にかけて発達した視覚的メディアに注目し、特に太平洋戦争の開戦から終戦までに書かれた戦争詩が、詩の表現として視覚的な様相を含み込んでいたことの意味を考察した。丸山薫の戦争詩は、その視覚的な表現において特徴的であるが、一方でそれは他の詩人、批評家たちにも共有された視覚的メディアの影響の結果であり、他方で「戦争」において要請された銃後の情報戦、あるいは兵站術の産物でもあったと考え、詩の表現を通じて戦争詩における視覚性のあり方を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this study, I focused on the visual media such as panorama, photograph and cinema, which progressed in the period from Meiji to Showa pre-war era, and tried to explain the reason why, in "war poetry" produced during the Pacific War, we can often find expressions related with visual media or the situations in which someone "see" the imaginary scenes of war. Some of Maruyama Kaoru's war poetry works show the characteristic visual media in daily lives of people who were not soldiers. On one hand, these works are results of Maruyama's interests in the visual media which shared to other modernism poets and literary critics. But on the other hand, these are products out of war technology which gives information on undergoing war to people in Japan. From these two points of view, I analyzed the expressions of Maruyama's poetry works and revealed the meanings of visual aspects in "war poetry".

研究分野：日本近代文学

キーワード：戦争詩 視覚性 映画 表象 丸山薫

1. 研究開始当初の背景

日本の近代詩はある意味で、象徴詩やモダニズム詩など、言葉を通じてさまざまな感覚を描き、読者もまたその感覚の愉楽を味わうことが可能となるようなメディアであった。近代になって視覚、聴覚を刺激し、時に攪乱する多様な手段が登場したが、詩はそうした新しいメディアとの親和性が極めて強かったと言える。モダニズム詩の研究では、詩が活字(タイポグラフィ)やカリグラムなどの方法が明らかにされている。本研究で取り上げる戦争詩(主に太平洋戦争中に執筆、流通したもの)も、特にラジオによって盛んに朗読されたという点については坪井秀人氏らの戦争詩研究によって、これまでも進められている。しかし、戦争を描き、また戦争中の銃後の生活に組み込まれた戦争詩が、視覚という点についてどのような役割を担ったのか、考察されてはいない状況であった。採択者は詩の感覚的表現について考える中で、視覚的なイメージについて関心を持ち、こうした観点から戦争詩を理解する展望が得られると判断した。

また、戦争詩は時局迎合的で、戦争讃美の内容を持ち、かつ優れた作品とは言いがたい面があったため、戦後詩の詩人たちからは厳しく批判され、またその作者自身も自らの制作の痕跡を消去しようとする傾向があった。結果的に、戦争詩人は責任を追及されると同時に、戦争詩自体が一時的な過ち(狂い咲き)と認識されるに至ったが、こうして囲い込まれた戦争詩は、その前後の詩との連関を問われることなく、近代詩史からもほとんど黙殺されてきた。

戦争詩を評価するのは困難だとしても、いかなる状況の中で執筆され、どのように享受されたのかを知ることが、近代詩の研究において重要であると考えられる。本研究は、こうした研究状況の中で計画された。

2. 研究の目的

本研究では、戦争詩という、近代詩の中でも特殊な位置づけをなされる一連の作品及びその様式について、それが近代のメディア技術の産物であるという観点から、特に視覚的な効果をどのように詩の中に組み込んでいったのかを考察することを、第一の目的とした。映画(映像)、写真、ラジオなどのメディアが、近代詩のエクリチュールと密接に結び付いていることは既に指摘されており、またそれは戦争詩に限ったことではないが、太平洋戦争という特殊な時期に、詩人が新しいメディアを活用しながら、いかに戦争という出来事を表象しようとしたかについて考察することを目指した。実際には丸山薫を中心とする特定の詩人や批評家しか取り上げることができなかったが、戦争詩の視覚性から詩全般の視覚的な表象形式、言葉と視覚的な

イメージとの関連性について考察を展開することを念頭に置いて研究を進めた。

また、最終的に近代詩というジャンルの歴史性を意識しながら、戦争詩を歴史的に位置づけることで、日本近代詩史のはらむ歪みを修正することも重要である。近代詩においては、詩人がまた詩の批評家・理論家でもあるケースが多く、詩というジャンルやその存在意義に対する自己意識が高いと考えられる。そのため、詩史の記述には実作者自身の価値基準が多分に入り込み、詩史の歪みが生じる可能性も高い。逆に言えば、ある時期の詩を検討することが、詩史全体の見直しに繋がる可能性も十分にあるということである。本研究では、こうした問題意識のもとで研究を進めた。

3. 研究の方法

戦争詩はまとめて出版される機会がほとんど無いため、まずは主要な戦争詩アンソロジーを、古書店で購入可能なものは購入し、また国立国会図書館等で調査・複写して、資料を集めた。集めた資料の一部は、戦争詩集の目次などをホームページで公開する作業を進めており、今後、データベースの作成・公開を目指していく。

次に、収集した戦争詩の中で視覚に関わる内容を持った詩をピックアップしていくと、詩の内部に設定された主体(語り手)が、ある光景や何らかの風景を見るという状況設定が比較的多いことが判明した。この時に重要なのは、主体にとって風景が、制御可能なものとして、あるいは主体に親和的なものとして描かれる傾向があるということだ。現実の風景は絵の中、窓枠、パノラマなどの中に封じ込められ、無時間的で動きのないものとして提示される。

このような戦争詩自体の分析と同時に、映像や写真に対する理論的な理解を深め、ポール・ヴィリリオやフリードリヒ・キットラーらのメディアに関する研究書を参照しながら、映像と戦争との関連、映像の特質を詩の分析に援用する理論的な枠組みを形成した。

そこで、以前から関心のあった詩人・丸山薫の戦争詩に焦点を当て、その表現機構や戦争時における役割などの分析に移った。丸山は戦争詩以前から映像には関心を持っており、早くから詩の中で記憶の映像的なイメージを提示していた。少なくとも丸山の戦争詩は、そうした以前の詩の延長線上にあるが、同時に映像が持っていたインパクトを縮減させたものとしても受け取れる。というのも、先に触れたように、戦争詩の中の風景は静謐とも言える不動性を持ち、リアルな戦争から読者を遠ざける、あるいは戦争の現実を馴致させる装置と言っても過言ではないからである。

また戦争詩自体の分析と平行して、詩史的な面から戦争詩を捉えるために、蓮田善明や

保田與重郎といった日本浪漫派系統の文学者の風景観や小説／詩を巡る言説を考察した。丸山のようなモダニズムの影響を受けた詩人のケースとは異なり、あまり映画や写真に関心を持たない蓮田や保田の場合にも、その至る所に視覚的な問題が、特に身体性と関連した形で散見される。

さらに、研究代表者が以前から携わっている原爆文学の研究においても、視覚的表象の問題は非常に重要な論点となっていることから、映画『二十四時間の情事』における原爆（戦争）表象のあり方、また鹿島田真希の小説『六〇〇〇度の愛』における精神分析的なアプローチによる被爆者（被害者）表象を、一見何の関わりもなさそうな戦争詩と結び付けて考察した。前者の中では、映像と言葉とが切り結ぶ関係の解体が目指されているという観点から考察を進めた。また鹿島田真希『六〇〇〇度の愛』においては、精神分析学が人間の心的な状況を抽象化し、眼差しの関係性として捉えている点に注目し、原爆の加害／被害の関係を新たに理解し直すことを試みた。

以上のような考察から鑑みた場合、戦争詩とはその視覚的表象において極度に抽象化され、脱身体化されることで、戦争をイマジネール（想像的）なものとして提示していることが理解できる。古語や定型を用いている戦争詩が多く見られることは、形式的にも戦争詩と読者との音声的、視覚的な親和性、同一性を志向していることを推測させる。

4. 研究成果

本研究の成果をまとめるなら、次の3点となる。(1)丸山薫の戦争詩の特質の解明、(2)戦争詩に連なる諸条件の分析、(3)近代詩史捉え直しへの展望。

(1)丸山薫の戦争詩の特質の解明

まずは、視覚性という点において丸山の戦争詩が明確な論点を提出していることを指摘し、戦争詩を出発点として近代詩の視覚的表象の問題全般を考える端緒を開いた。丸山は戦争詩以前から映像・映画に関心を持っていたが、映像的なイメージを提示した作品は一定の強度を備えていた。萩原朔太郎の影響を受けた丸山は、映像や風景を描く時に、見る主体と見られるものとの間の緊張を常に忘れなかったと言える。戦争詩において、緊張が薄れているのは間違いない。詩として見れば、優れたものとは決して言えない戦争詩だが、しかし戦争の状況を映し出し、一定の役割を担ったこともまた事実である。

今後の課題として、同時代の戦争詩をさらに幅広く分析することで、新たな視覚性の問題をそこから抽出することが挙げられる。

(2)戦争詩に連なる諸条件の分析

これまで、朗読という点に注目し、戦争詩

の源流として民衆詩派を位置づける考察、またモダニズムの延長線上に位置づける研究などはあったが、視覚性という観点から言えば、例えば四季派の「風景」に対する意識、さらに遡れば萩原朔太郎のパノラマ・風景を描いた詩群、そして雑誌『コギト』『日本浪漫派』『文芸文化』などで活躍した詩人・批評家たちの詩論、視覚という点において特異な作品を生み出した梶井基次郎の作品など、近代詩における視覚的認識の枠組みは、多様な形で生み出されている。それらは当然ながら戦争詩へと収斂させるべきものではないが、戦争という状況において詩の中で視覚的な枠組みが利用されたことの意味を考える上で、それ以前の詩における視覚表象に注目することは重要である。

大げさに言えば戦争詩は、個々の詩人における映像・諸感覚への関心が、戦争という特異な状況下で、戦争遂行の手段として統合されていったものである。とはいえ問題なのは、他方で戦争詩において、リアルな感覚というものが遠ざけられる傾向があったということである。戦争のリアルな実相を排除しながら戦争を描くということ。この歪みの解明が今後の課題である。

(3)近代詩史捉え直しへの展望

近代詩史に関しては、もちろんモダニズムにおけるメディアへの関心を戦争詩も確実に受け継いでいる。その単純で退屈な見かけ以上に、戦争詩は新しく、技巧的であると言える。その意味で、戦争責任などの倫理的問題は措くにせよ、戦争詩は近代詩の展開の上に位置づけられるべきものである。確かに戦後詩人の達成度は極めて高く、多くの優れた詩を生み出しているが、戦後詩人たちが戦争詩を批判し、あるいは連続性を見なかったことで、近代詩史の歪みが生じたのだとすると、今後は戦後詩人による近現代詩史を検証することを課題として考えていかなければならない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

野坂昭雄、戦争詩の視覚性に関する試論——丸山薫の作品を手がかりに——、近代文学論集、査読有、40号、2015、pp.30-43

野坂昭雄、鹿島田真希『六〇〇〇度の愛』、あるいは原爆体験というレッスン、原爆文学研究、査読無、12号、2013、pp.17-27

[学会発表](計5件)

野坂昭雄、映画『二十四時間の情事』が映し出す「ヒロシマ」、日本近代文学会11月例会、2014年11月22日、東京女子大学

野坂昭雄、保田與重郎の風景観について、蓮田善明研究会第15回例会、2013年10月5

日、熊本学園大学

野坂昭雄、原爆 という観念論—鹿島田真希『六〇〇〇度の愛』の考察、原爆文学研究会第41回研究会、2013年4月27日、福島大学

野坂昭雄、蓮田善明の小説と小説論、蓮田善明研究会第10回、2012年12月8日、熊本学園大学

野坂昭雄、昭和十年代の森鷗外、蓮田善明研究会第6回例会、2012年4月14日、熊本学園大学

〔図書〕(計1件)

石川巧・川口隆行編著、野坂昭雄他(共著)『戦争を読む』、ひつじ書房、2013、pp.124-138

6. 研究組織

(1)研究代表者

野坂 昭雄 (NOSAKA, Akio)
大分県立芸術文化短期大学・国際総合学科・准教授
研究者番号：20331936